浮世絵館だより

藤沢市
藤澤浮世絵館

2023 年
9 月
WEB 版

アナザー東海道　東海道の多様と異様な描き方

2023 年 9 月 12 日（火）~11 月 5 日（日）

東海道のイメージと広重の影響

江戸時代、参勤交代や物資の輸送によって街道整備が進み、人の往来が増えたことで、東海道は栄えていきました。

そのような中で、東海道の宿場を紹介した「東海道名所図絵」（一七九七年）などの刊行により、庶民の間で旅への興味が広がり、十九世紀前半には寺社参詣を兼ねた旅行ブームが起こります。「一生に一度はお伊勢参り」と言われたように、特に東海道を利用しての伊勢参りが流行しました。

広重はこの旅行ブームを背景に、街道を行く旅人や宿場町の様子を、季節や天候を織り交ぜながら「東海道五拾三次之内」（保永堂版）を旅情豊かに描き出しました。出世作となったこの揃物の成功により、その後、名所絵の名手として、二十種類以上の五十三次シリーズを制作しています。

広重の「東海道五拾三次之内」（保永堂版）は、東海道の旅の視覚的なイメージとして広まり、その後に描かれる名所絵に大きな影響を与えました。

▲歌川広重　「東海道五拾三次之内　藤沢」（保永堂版）

歌川国貞「東海道五十三次之内　藤沢図」など、他の絵師による類似作品や背景に広重の名所絵を拝借した作品なども数多く作られました。

▲歌川国貞「東海道五十三次之内　藤沢図」

▲仮名垣魯文・落合芳幾「東海道中膝栗毛弥次馬　藤澤」

また、ゆかいな二人組のキャラクター「やじきた」でおなじみの十返舎一九「東海道中膝栗毛」（一八〇二年）は、二十一年間にわたって刊行されロングセラーとなった滑稽本です。広重の「東海道五拾三次之内」（保永堂版）と共に、東海道の旅のイメージを形づくりました。

ユニークな東海道「鉢山図絵」

江戸時代後期になると、浮世絵だけでなく、物語など様々なジャンルの題材となった東海道の宿場ですがなかでもとてもユニークな版本「東海道五十三駅　鉢山図絵」を紹介します。

大阪の文化人であった木村唐船（きむら とうせん）（生没年不詳）が、歌川広重の「東海道五拾三次之内」をはじめ、様々な東海道の名所絵をもとに「鉢山」を作りました。「鉢山」とは、器の上に石や土を盛り、植物や人工物を配置して風景を立体的に表現した造形物です。中国の園芸文化から来ているとされ、江戸時代の文化人たちの間で広まりました。唐船が作った「鉢山」を、江戸後期から幕末にかけて活動していた歌川芳重（生没年不詳）が絵画化し、嘉永元年（一八四八）に版本として刊行されました。

立体で表現した東海道の名所絵をさらに絵画化した詳しい理由はわかっていませんが、当時流行していた「東海道」と江戸時代後期頃に広まった「鉢山」を組み合わせたという文化人たちによるユニークな発想がうかがえる版本です。

ここに注目！その１

広重の名所絵と比較してみると、どちらも藤沢宿を代表する遊行寺が描かれています。残りの「鉢山図絵」にも各宿場に関係する名所が描かれています。

歌川広重「東海道五拾三次之内　藤沢」（保永堂版）

歌川芳重　「東海道五十三駅　鉢山図絵　藤沢」

歌川芳重　「東海道五十三駅　鉢山図絵　箱根」

ここに注目！その２

「鉢山図絵」は、各宿場によって「器」もそれぞれ異なります。風景とともに、「器」の色や形にもご注目ください。

歌川芳重　「東海道五十三駅　鉢山図絵　亀山」

「アナザー東海道」

池内俊雄（雁の里親友の会事務局長）

藤沢市藤澤浮世絵館展示「アナザー東海道」東海道の多様と異様な描き方」の開催に際して、雁の里親友の会事務局長で、広重研究者の池内俊雄氏からご寄稿いただきました。

藤沢市内の施設では「アナザー東海道」と題した二つの展示が開かれています。「藤澤浮世絵館」で開かれているものには「東海道の多様と異様な描き方」というサブタイトルが付けられ、歌川広重の東海道ものを中心に据えながら、その他の絵師による東海道ものをはじめ、石版画や漫画家が手掛けた東海道など、広重亡き後に東海道がどのように描かれたのかを、時代を追っての変遷が分かるような企画となっています。

一方、藤沢市民ギャラリーで開催されるものには「広重研究者による、もうひとつの物語」という副題があります。筆者はもともと日本人の季節観ともいえる「花鳥風月」の世界について、障壁画・浮世絵や和歌・俳句などから調べてきました。その中で、絵師であった歌川広重が秋の到来を告げる存在であった「雁」を、どのような意味合いで絵の中に取り込んで来たのかに焦点を当てて解釈を試みてきました（図１）。

図１歌川広重「高輪之明月」　©株式会社アダチ版画研究所

それと平行して、歌川広重が「八朔御馬献上之行列」に随行して実際に京都にまで足を運んだのかどうかについても考察を重ね、そのためには広重存命中には版行されなかった版下絵を渉猟することで、京都へのぼったことを裏付ける手掛かりが得られるのではと考えました。

大英博物館には広重の画帖が伝わり、ロンドン市内の画商が「八朔御馬献上之行列図版下絵」を所有していることが分かり、それらを確認する目的でロンドンに渡りました。その時、画商から版下絵の画像ファイルを提供してもらいました（図２）。

図２歌川広重「八朔御馬献上之行列図版下絵」（個人蔵）

また、広重の未完の作品が大正８年に酒井好古堂から刊行され、その内の主な版下絵が、やはり酒井好古堂が編集・発行していた『浮世繪』に掲載されていたことも分かり、今回の展示では、大正８年には刊行されなかった一枚の墨版を極力忠実に再現し、先行する同様の作品を参考に、着色を試みてみました（図３）。

図３歌川広重「五十三次餘興　間之宿立場　大森」（佐藤裕奈氏着色）

酒井好古堂が刊行した広重の版下絵には、所謂（いわゆる）「天童もの」と称される肉筆画と構図が共通する作品があり、それらの類似性についても「武相名所旅絵日記」が下地にあると考えられ、今回は江の島や大山道に関係する作品を紹介することにしました（図４）。

図４歌川広重「相模大山来迎谷図　五月」（那珂川町馬頭広重美術館所蔵）

▶図４「大山道中張交図会」（藤沢市教育委員会所蔵）

図４歌川広重「江ノ島岩屋図　卯月」（那珂川町馬頭広重美術館所蔵）